東京銀座西八丁目　民友社　徳富蘇峰先生　侍史　／新大阪　李光洙[[1]](#footnote-1)

蘇峰大先生

御暇乞の節に賜はりたる御言葉、肺肝に銘申候。無名の一書生たる小生に向けらるゝ數々の御厚情、只感激あるのみに御座候。一身を忘れ、世に盡す唯此のみにて先生の御嘱望に辜负せざらんことを誓申候。

林銑十郎大将は快く接見下され、一時間程朝鮮の事など話申候。誠に質朴禮譲、私心なき人格者と欽服仕候。御紹介厚く御礼申上げ候。賜はりたる御著、昨日より車中にて擎讀仕るべく候。早々敬具

丙子六月三日夜　李光洙再拜

1. Hotel New Osaka の便箋と封筒を使用。この手紙が書かれた3ヶ月前に2・26事件が起きている。李光洙は5月と6月に東京の家族のもとに滞在しながら安岡正篤などの著名人と会見した(「東京求景記」『朝光』1937.1)が、これも徳富蘇峰の紹介だったのかもしれない。林銑十郎は朝鮮軍司令官をしていたときに満州事変で関東軍の要請を入れて独断で出兵し「越境将軍」と呼ばれた。李光洙との会見時は陸軍大将で、翌年2月に内閣総理大臣になるが3ヶ月で退く。そのあと近衛文麿内閣が成立し、1ヶ月後に日中戦争が始まった。

   このとき李光洙は学齢に達していた息子李榮根氏を京城の学校に通わせるために同道していた。李榮根氏は先述した「이런일 저런일」のなかで、大阪の旅館で父は原稿を書き、自分は窓の外の川を通るポンポン蒸気を眺めていたと回想している。そのとき李光洙が書いていたもののなかに、この手紙もあったのだろう。 [↑](#footnote-ref-1)